
ヘタリア版 悪ノ娘

ぴょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタリア版 悪ノ娘

【Nコード】

N1468V

【作者名】

ぴょん

【あらすじ】

悪ノ娘をヘタリア版にしてみました（ 、 、 ）ノ

序章 (前書き)

初投稿で、色々さだです。すみません。

序章

人が、罪に気づくのは、

罪を犯してから。

後戻りは、もう出来ない。

こんなこと、誰も望んでいなかった。

こんなことを引き起こした自分さえも。

…こんなはずじゃなかったんだ。

ここは、中世ヨーロッパ。

その頃のハクアリン地方は、3つの国に分かれていた。

最も大きく、権力があるのはクロスチュール王国。

豊かな緑の国、ターナランド王国。

海に囲まれた島国、トマナーニャ王国。

この3つの王国が、戦火を交えるなんて信じられないほど、世界は平和だった。

そう、悪ノ王子が現れるまでは。

序章 (後書き)

いやあ、書くのは楽しい(、、、)ノなあ

クロスチャール王国

双子の王子（前書き）

ああ、もうggggだ。しかも、明日テスト、、

クロスチュール王国

双子の王子

ゴーン・・・ゴーン・・・

祝福の鐘が鳴り響く。

ここは、クロスチュール王国。

またの名を、黄の国。

黄の国では、新しい王族が誕生したのを祝っているのだ。

フェリシアーノⅡヴァルガスと、ロヴィーノⅡヴァルガスの誕生を。

この兄弟が、悲劇を呼ぶとは知らずに・・・

城内。

そこでは、2人の貴族が言い争いをしていた。

「次の後継者は、ロヴィーノⅡヴァルガスにするべきなんだぜ

ちなみに、反対意見は認めないんだぞ」

「なにを言ってるんですか、このお馬鹿さんが。フェリシアーノⅡ

ヴァルガスこそ、

後継者にふさわしいのです！」

「なにをー！」

「貴方こそ！」

こんな些細な事だった。

しかし、双子と言うのは、何かと問題を起こすものである。

そのうち、後継者争いはエスカレートをしてしまったのだ。

クロスチール王国

双子の王子（後書き）

ども

びよんです

アップおくれて、ごめんなさい！

とくに東さん、、、ごめんね

悪ノ政治紛争（前書き）

アップ遅れてすみません（^ー^；）

悪ノ政治紛争

些細な言い合いが、やがて城全体に広がり、それは大きな対立となった。

些細な言い合いから半年。

ついに、城の内部から国まで、後継者についての争いに巻き込まれ、やがて大きな政治紛争となった。

〔政治紛争の真っ只中〕

ロヴィーノは、どさくさ紛れに誰かに連れて行かれてしまおうとしていた。

それは、かつての三英雄の一人、アントーニョだった。

「ロヴィーノ、堪忍しいな。今は、こうするしかないねん。ほんまに、堪忍な。」

アントーニョは、ロヴィーノを抱き上げると、その場を後にした。

数日後。

ロヴィーノがいない事に気づいたロヴィーノ側の人間たちが、女王に報告をした。

女王の命令により、

かくして、悪ノ政治紛争と呼ばれるこの短い紛争は幕を閉じたのだった。

その頃、国のある小さな村では、恐ろしい病が流行していた。

この病の特効薬はこの時代には無かった。

謎の病は、城にも悲劇をもたらした。

これは、ヴェネチアーノとロヴィーノが六歳のときに起こるものだが、まずはロヴィーノのその後の話。

「アントーニヨの家」

ロヴィーノは、ちっちゃい癖に、とってもわがままだった。

そして、とっても優れた記憶力を持っていて、アントーニヨの家に来て何年経っても

「ヴェネチアーノは？」

とか、

「ヴェネチアーノは、お城でなにしてんだ？」

とか、いつも言っていた。

ちなみに、国民には、ロヴィーノは政治紛争で幼き命を落とした、という事になっていた。

だから、アントーニヨはロヴィーノにむかって、

「ええか、人には自分のこと、あんま言っちゃあかんよ。」

と言っていた。

そして、用心の為、ロヴィーノをあまり外には出さなかった。

そうして過ごす事約六年。

クロスチュール王国に、とんでもない悲劇がふりかかる。

狂いだす歯車（前書き）

いやあ、アップ遅れてすみません（^ー^；）

狂いだす齒車

〽六年後、ロヴィーノ、ヴェネチアーノの誕生日〽

王宮では、ヴェネチアーノ王子の誕生パーティーの準備に皆が駆けずり回っていた。

ここで補足Time

悪ノ政治紛争後、三英雄の一人、アーサーⅡカーランドにより、ヴェネチアーノのロヴィーノとの記憶はデリートされていた。

〽王宮、女王の間〽

女王は、亡き夫の肖像画にむかつて、話しかけていた。

「あなた・・・ヴェネチアーノは、もう六歳ですよ・・・。アントーニョの所にいる、ロヴィーノでもありますわ・・・。時が経つのは、早いものですわね。」

「つつ！」

突然、女王は崩れ落ちた。

〽アントーニョの家〽

「ロヴィーノ！親分のお帰りやで！」

「腹減ったぞ、ちくしうめ！」

「はいはい。ロヴィーノ、堪忍な。」

「・・・今日は何の日だか、忘れてないよな、コノヤロー」

「はいはい。ほら、これ。」

「剣だ！ついに俺も一流の騎士だ！こんちくしーが！」

「明日から特訓せなあかな。」

「お前より強くなるんだぞ、ちくしうめ！」

「はいはい。明日は早いから、早くシエスタしとき。」

(作者：シエスタって、昼寝だよね。 (^ ^))
今日ものほん親分子分でした。

狂いだす歯車（後書き）

あたしを応援してくれた悪友たちに感謝。

狂いだす齒車Part 2

「城の内部、女王の間」

数時間後。

「女王様？失礼致します。・・・女王様？入りますよ？」

その数秒後に、悲鳴が上がったのは、言うまでもないだろう。

女王は、恐ろしい病にかかっていた。

それは、国で流行していた、原因不明の病で、特效薬などこの時代には無かった。

「お母様、死んじやいやだよ、お母様！」

その3日後、皆の必死の看病にも関わらず、女王は永遠に目覚めることは無かった。

「アントーニヨの家」

アントーニヨの家では、ロヴィーノが泣いていた。

その頃、ヴェネチアーノも泣いていたのだが、彼はそれを知るよしもなかった。

しかし、ロヴィーノはすぐ泣き止むと、何処かに居る、双子の弟にむかって、

「お前のことは、俺が守るからな、ちぎいーーーーー！」
と、宣言した。

（作者：本当は、ロヴィーノ、この後大泣きだったよ〇（＾　＾）
〇）

狂いだす歯車Part2（後書き）

ああ、
疲れたあ

狂いだす歯車Part3（前書き）

いきなり内容飛びます

狂いだす齒車Part3

〽八年後、アントーニヨの家〽

アントーニヨの家では、あのツンアホロヴィーノが、十四歳の立派な青年になっていた。

アントーニヨからも、一通り剣術を教わり、あの幼い面影はなかった。

ある日、アントーニヨがロヴィーノに、

「お前、王宮の召使いやらへん？ヴェネチアーノを守るために。」と、仕事をもちかけた。

無論、ロヴィーノはこれを引き受けたのだが、これが後に悲劇となる。

〽ロヴィーノ、ヴェネチアーノ共に十四歳、王宮にて〽

ロヴィーノは、王宮に着いてから、真っ先にアーサーのもとに通された。

そして、自分の血統については、ヴェネチアーノに秘密にするよう、警告された。

何故？と聞くロヴィーノに、アーサーはヴェネチアーノのロヴィーノについての記憶は理由があつて、消した、との話をした。

ロヴィーノは初め、ショックを受けたようだったが、はい、と応え、とアーサーの部屋を去っていった。

城の中。(前書き)

ああパソコンのパスワードやっと解除したよ。

城の中。

ロヴィーノはその後、ヴェネチアーノからの呼び出しを受け、ヴェネチアーノの部屋へと向かっていた。

くれぐれも双子だとはれないように、と言われたが、顔が似ていることをどう説明すればいいかと考えながら歩いていた。

考えながら歩くと、もう部屋まで来てしまった。

「失礼致します。呼び出しを受けたロヴィーノです。」

「・・・入って〜！」

キィ・・・

「わあ、君がロヴィーノ？噂通り俺に似てるね！まるで双子みたい！」

一瞬、ばれたかと思い、背筋に寒気が走った。慌てて、

「世界には三人、顔が似てる人が居るものですよ。」

と言って置いた。ヴェネチアーノは不思議そうな顔をして、そうだね、と言った。

城の中。(後書き)

ぎゃー！なんかグダグダ and 短っ
俺はなんというグダグダ作者だっ許してくれっ

城の中。十四歳の誕生日。ロヴィーノ視点（前書き）

わあ、グダグダだなあ。

まあ、生暖かい目で見てね！

城の中。十四歳の誕生日。ロヴィーノ視点

ロヴィーノがヴェネチアーノの召使いとなってから、半年が過ぎようとしていた。

今日は三月十七日。

ロヴィーノ、ヴェネチアーノの誕生日。

その日のロヴィーノは、雑用として、城を掃除したり、食べ物を運んだりしていた。

城の一部を除き、ほとんどがヴェネチアーノとロヴィーノの関係を知らないので勿論、自分を祝ってくれる者はなかったが、弟の誕生日を誰もが祝っていた。

今日のパーティーは、国民の税金でまかっていた。

国民はパンを食べるお金も無いのだが、ヴェネチアーノはそんなことを知っている訳がない。なぜなら、

「パンがないなら、パスタを食べればいいんじゃない？」

と言った張本人なのだから。

そのせいで、国民からいろいろ恨まれているらしい。

だが、いざという時、ヴェネチアーノを守るために、俺がいるのだから。

・・・あいつの双子の兄として。

城の中。十四歳の誕生日。ロヴィーノ視点（後書き）

うわなんだこの文章。

グダグダだなあ。（笑）

笑うしかねえ。

城の中。十四歳の誕生日。 P a r t 2 (前書き)

腐れ縁の皆さん、ぴよんをせかさないで (<|>)
これ大変なんだゆ (<|>)

城の中。十四歳の誕生日。Part 2

準備をしていると、アントーニヨがこっちに向かってきた。彼をもパーティーに呼ばれていた。

アントーニヨは、王子の身勝手な金遣いに、ほとんど毎日反論していて、いつ殺されてもおかしく無い。

しかし、三英雄のこともあり、王子は手が出せないようだ。よう、と声をかけられたので、こんにちは、とかえしたら、

「そんな堅苦しくせんでええよ。昔みたいに親分呼びしてもええんやで？」

「俺は昔から、アントーニヨ様を親分と呼んだことはありません。」
「なんや今の、グサつときてもうたわ。」

そんな会話をしながら、今日も平和だな、と思つ昼下り。

この日を境に、悲劇がおきようと言つのに。

城の中。十四歳の誕生日。Part 2（後書き）

ああ（^ー^；）グダグダだなあ。

城の中。 十四歳の誕生日。 (前書き)

ああ (^ | ^ :) グダグダ駄作だあ (< | >)

城の中。 十四歳の誕生日。

やがて夕方になり、パーティーが始まる頃になった。

すると、俺の幼馴染、そしてこの城のメイドでもある、エリザベータが走ってきた。

もう料理は全部運んだはずだが・・・？

「大変なのよ！まだ残っているの！とっても大きいのが！」
次に俺が見たものは、

・・・俺と高さが同じくらいの、本物のお菓子の家だった。
王子である権力で、こんなものを作るとは。

弟に若干あきれた。

あきれている時間など無い。まずこれを運ばなければ。

幸い、台車にのっかっていたので、運びやすかった。

奥の方からは、パーティーで盛り上がる人々の声が聞こえていた。

グダグダ作者ページ

ぴよん：どうもぴよんです！読者の皆さん、読んでくれてありがとうございます！あと、腐れ縁の皆さん、兄ちゃん、ぴよんを応援してくれている皆さん、ありがとう！そして、ようこそ！このページは、作者の作者による、作者のためのグダグダゆるゆるページだゆ！楽しんでいてね！

フェリ：そういえばさあ、なんで俺はヴェネチアーノで、兄ちゃんがロヴィーノになってるの？

ぴよん：間違えたんだ、許して・・・フェリ。

フェリ：許さない。

ぴよん：即答されたっ

ロヴィ：なんで俺は馬鹿弟の召使いつてなっただよ。

ぴよん：設定だからしょうがないじゃん。（笑）

ロヴィ：（笑）が余計。

ぴよん：ロヴィのコノヤロー。が無い。なんか怖い。

アント：イタちゃん！トマト持ってきたでー！

ぴよん：親分っ！マカロニ兄弟が怖い。

フェリ：なんか言っ たかなー？（黒笑

ぴょん：な、何も？

ロヴィ：ふーん？

ぴょん：怖いよお！

アント：こんなグダグダゆるゆる作者を、これからもよろしくなあ。

ぴょん：終わっちゃうの？

城の中。十四歳の誕生日Partyすりー（前書き）

お待たせしましたぁ（笑）

城の中。十四歳の誕生日Partyすりー

パーティー会場は、貴族達でごった返していた。

奥にある玉座に座っているのはヴェネチアーノだ。軽く会釈すると、笑顔で手を振ってくれた。

召使いである俺は、弟と違って色々な雑用を押し付けられる。

何故兄弟なのに、こんなに待遇が違うのだろう。神様は不公平だ。そう思ったとき、数少ない、俺ね正体を知る貴族、ローデリヒが話しかけてきた。

「兄弟なのに、何故こんなに待遇が違うのだろう、とでも思っていたのですか？」

「・・・ローデリヒ様は、読心術でもお使いになるのですか？」

「いえ、使いませんよ。・・・アーサーなら、使えるかもしれませんが。」

「・・・パーティーも、そろそろ終盤のようだ。もう、9時を過ぎていた。」

外で、月が静かに光っていた。

ヴェネチアーノと、アントーニョ（前書き）

みんな、ぴよんの復活だよーん！

小説書け書け五月蠅かった悪友、そして兄ちゃん、ありがとおおおお！

ヴェネチアーノと、アントーニョ

その夜、ヴェネチアーノにエリザベータと俺は呼び出されていた。

「お呼びでしょうか、ヴェネチアーノ様。」

「うん。・・・エリザ、あのさ、最近食物庫に不審な人物が見られるとか言う話、聞いたことない？」

「ええ……。噂ですが……。」

「その人物を、調べてくれないかな？王子の僕に逆らうとは、いい度胸だよな。」

「・・・仰せのままに。」

翌日。

「エリザ？ちよつといいかな。」

「はい？なんでしょう。」

「あのさ、例の人物、エリザは知ってるんでしょ？」

「？・・・話そうか迷っていたのですが……。」

「誰なの？」

「・・・誠に言いにくいのですが……。実は、三代英雄の一人、アントーニョ様、と小耳に挟んだのです。」

「そう、ありがとう。もういいよ。」

「では、失礼いたします。」

数時間後。

「ロヴィ、ちよつといいかな。」

「はい？」

「例の人物だけど、アントーニョ〓ヘルナンデス〓カリエドらしいんだ。」

「?・・・はい。」

「逆らう人は、排除しなくちゃね?（黒笑）」

「あの・・・それは、どういう意味で・・・」

「そのまんまの意味だよ?アントーニヨを、暗殺してくれないかな?」

「・・・。」

「まあ、明後日決行だから。それまでに考えといて。」

「・・・はい・・・。」

ヴェネチアーノと、アントーニョ（後書き）

うわぁ・・・グダグダぁ（笑）

ロザリーノと、アントーニョ（前書き）

ども！

おなじみぴよんでーすw

今回もggggですが、よろしく願いますっ！

ロヴィーノと、アントーニョ

翌日。

厄介な朝だ・・・。

いよいよ明日、か。

ロヴィーノはわざとらしくあくびをした。

「ふああ・・・」

・・・兄弟を信じるか、親代わりを信じるか・・・。

そんなシリアスな雰囲気浸っていると。

「ロヴィーノ、ちよつといい？」

エリザが話しかけてきた。

「あの・・・さ。アントーニョが貴方を召使いにした理由、知ってる？」

「?・・・王子を守るため、だろ？」

「それが・・・王子を暗殺する為だって聞いたんだけど・・・、貴方やっぱり知らなかったのね。」

!?・・・あのアントーニョが・・・そんなことを・・・?
あり得ない・・・!でも本当なら・・・。

「ロヴィーノ?ロヴィーノ!」

「!はっ、はい!!」

「大丈夫?ぼーつとしちゃって。」

「はい・・・大丈夫、です。あの!」

「何？」

それは本当なのか、と聞こうとした。しかし、何かの気持ちちがそれを止めた。

「えつと・・・いえ、なんでもないです。」

「そう・・・あ、今の話、気にしちや駄目だからね!」

「ええ・・・それでは失礼いたします。」

俺は小走りでその場を後にした。でも決まった。

俺の決心が。

ロヴィーノと、アントーニョ（後書き）

特になーし！

みんな、読んでくれてありがとう！

感謝ですー！*。。。*：。。。。：*。：*。：（*。*）

！*：。。。。：*。。。。*。

うん、もう書くこと無いから失礼いたしまーす！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1468v/>

ヘタリア版 悪ノ娘

2011年12月17日22時51分発行